

・宮城道雄：春の海

本日のプログラム冒頭にお届け致しますのは、新春といえば、の傑作「春の海」です。盲目の天才・宮城道雄が瀬戸内海を旅行した際に、島々の綺麗な様子、のどかな波の音、舟の艦をこぐ様子、舟歌、鳥の行き交うさま等が表現されています。邦楽界の代表曲として、お正月や新春に限らず四季を通じて演奏されますが、場所、奏者、シチュエーション等々によってその時々で演奏が変わってくるところも、音楽の魅力の一つです。

今回は米子の海と空気にインスピレーションを受けながら、尺八の黒田鈴尊、箏のLEOならではの春の海をお届け致します。

・藤倉大：竜

今野玲央さんからのリクエストで書かれたソロの箏の作品「竜」。僕が作曲する時にいつも思うのは、どうやったら新しい音色が作れるか、なのだが邦楽器のために書く場合は、その前にどうしたらこの伝統のある邦楽器がその楽器らしく輝くことができるのか。そこを絶対的に損なわないようにしたい、と僕はいつも思う。

そこで今回は今野さんと長時間のチャットや、僕がちょっと楽譜を書いては今野さんに送り、今野さんが自撮りでその動画を撮り、送り返してくれたりした。半分以上僕が書いた楽譜は僕の思うようには響かず、消去される。なかなか上手くいかない。

でもそんな1日に何回も往復される楽譜の断片とその動画の中で、「これだ！玲央くんはどう思う？」「すごい綺麗に鳴ってます！」という瞬間があったりもする。それがリードしてくれ、作曲が進んで行った。この喜びの瞬間、このために僕は作曲しているようなもの。

とてもグルーブ感のある、それでいてどこか地上から浮いた感じの部分もあるような、それでいて、箏を弾く時に全体重をかけてはじくような、どっしりと構えたセクションもあると思う。

(藤倉大)

・宮川如山：阿字観

本曲の成り立ちには諸説ありますが、阿字観の哲理（息を調べて心を静め、息を吐く毎に宇宙の根源としてのア（梵字）を念じ、呼吸とアの心の声ととけあって生命の根源に帰入するという、弘法大師空海が伝えた真言密教の瞑想法）を尺八で表現した曲であるともされております。

阿字という原曲からこの曲、曲名に整えた宮川如山（1868-1946）はそのような事をいわなかったようなのですが、それは“味噌の味噌臭きは上味噌にあらず”の論と一緒に、禅のことをあまり口でいうと禅から離れていくから、なのかもしれません。特徴的や首振りとかのユリは、盥一杯の水をこぼさないように揺れる様や、箎でもみ殻を飛ばすなどの動きを真似ているともいわれております。この曲特有の深いユリの連続で没入して（させて）いく様に、本来の阿字観らしさが端的に表現されてるとも感じています。

・沢井比河流：土声

土声は土から生まれた二つの声。

それは箏の響き、尺八の詩声。

箏はその声を土に通わせ、尺八の声は土に宿る命を詩う。

二つの声は重なり、響きあい、存在しあう。

(沢井比河流)

(休憩)

・長澤勝俊：萌春

春を題材にした邦楽の曲の名曲として「春の海」がありますが、それに勝るとも劣らず名曲として数多くの演奏家に愛されているのがこの「萌春」という曲です。

春といえば、生命の息吹を感じ出せる季節ですが、この曲は冬の静けさからはじまり、やがてつぼみが芽吹き、景色が色付いていく様をまるで生命のダンスかの様に表現している一曲です。

・光崎検校：五段砧

19世紀半ばに光崎検校が作った箏の二重奏です。光崎検校は、幕末に箏曲界に音楽面での革命を起こした偉大な作曲家で多数の名曲をのこしましたが、中でも「五段砧」は、2人の音と旋律が、まるで隕石や星屑のように宇宙空間を飛び交う様に聞こえる傑作です。

「砧」とは、洗濯した布の皺を伸ばすための布打ちのことで、特に秋の夜はその音が遠くまで響いたことから、「砧」のフレーズは、秋らしい趣を表すものとして、古来より様々な音楽や芸術作品の題材となりました。

本日は箏の本手(低音)と尺八による替手(高音)でお届け致します。

・バッハ：G線上のアリア

ヨハン・ゼバスティアン・バッハが作曲した『管弦楽組曲第3番ニ長調 BWV1068』の第2曲「エール (Air)」を、ドイツのヴァイオリニストであるアウグスト・ウィルヘルミがピアノ伴奏付きのヴァイオリン独奏のために編曲したものの通称で、「G線上のアリア」という通称は、ウィルヘルミが編曲に際してニ長調からハ長調への移調を行ったため、ヴァイオリンの4本ある弦のうち最低音の弦、G線のみで演奏できることに由来するとのこと。

箏と尺八に編曲するにあたり、箏の短い余韻、そして尺八の息づかいを行かせる様にキーを変更して音域を変え、邦楽器ならではの音を活かしながら、祈りを込めて演奏いたします。

・沢井忠夫：上弦の曲

箏の天才的な演奏家であり、作曲家としても有名な沢井忠夫の箏と尺八による二重奏です。作曲者は下記の様に述べています。

“この曲は、古き時代の人々が信仰の対象として月を仰ぎ、それぞれの想いを祈ったであろうことを思い巡らせながら書いた曲である。全体を通して日本の伝統楽曲の雰囲気濃厚に持っている。曲は箏と尺八それぞれの自由な物言いに始まり合奏に入る。一段ごとに高潮した合奏は、最後のオスティナートの部分で最高を迎え、やがて初めの部分と合奏で再現して終る。”

古代のシャーマンの儀式をおもわせる神秘的で濃厚な雰囲気が交差される邦楽界の傑作、プログラムのめ、トリとして大事に演奏させて頂きます。(黒田鈴尊)

師であり、作曲者のご夫妻でもあった沢井一恵先生も大切にされているこの曲を、心を込めて演奏させて頂きます。(LEO)